

宗教とグローバリゼーション

— 近代国民国家形成の帰趨とその超克 —

宮 嶋 俊 一

要旨

宗教のグローバル化は、はたして現代的な現象と呼べるのだろうか、それとも宗教は古代からグローバル化していたのだろうか。それは宗教をどのような位相で捉えるかによる。宗教を現象的に捉えれば前者となるし、逆に本質的に捉えれば後者とも言えるだろう。ただし、宗教のグローバル化は近代国民国家との関連から考えるべきである。近代国民国家が形成されることによって、元々は国境とは関わりなく信仰・実践されてきた宗教に対していったんは世俗国家という枠組みを当てはめ、国ごとの宗教のイメージを形成した上で、国家を超える現象としての「グローバル化した宗教」という見方が作られたと考えられる。さらに、かつての世俗化論がグローバル化と宗教の衰退を結びつけて考えていたのに対し、むしろ社会の再聖化の中で宗教の個人化がグローバルな宗教運動（新靈性運動）と結びついていく反面、宗教はグローバリゼーションに反する動きとしてのナショナリズムとも結びついている。

キーワード：近代国民国家、個人化、ナショナリズム

1. はじめに

本稿の課題は、宗教のグローバル化¹とはいかなる事態であるのか、それを概括的・包括的に検討することである²。後述するように、宗教が国家を超えて伝播する現象は、既に古代においても見られた。キリスト教、仏教、そしてイスラームなどは世界各地に伝播し、「世界宗教」と呼ばれてきた。もし、このような「宗教の拡散」を「宗教のグローバル化」と同義と見なすのであれば、宗教は古代からグローバル化してきたのである³。そして、それだけのことであるならば、あえて「宗教のグローバル化」という問題設定を行う必要はないだろう。

宗教のグローバル化がいま問題とされるのは、前近代社会、あるいは近代前期社会とは異なった現象が生じつつあるという認識が持たれてい

るからである。その認識の前提となるのは近代における国民国家の形成とその限界状況であろう。グローバリゼーションとはまず近代国民国家が形成され、その国境を越えてヒト、カネ、モノ、情報の動きが活発化した結果、国家の役割が相対的に弱体化していく現象と捉えられているのである。それゆえに、グローバル化論は、ポストモダン論とも結びつけられてきた。

ただし、こうした問題認識においても宗教は経済や政治の領域と比べるとやや複雑な様相を呈している。というのも、近代国民国家の形成過程において政治や経済のシステムが国家を単位としてきたことから明らかなとおり、政治・経済と国家は近代において密接に結びつけられてきたのに対し、宗教においては近代化の過程においてむしろその紐帯が解かれてきたからである。つまり、国家を超えた拡散という意味だ

けでなく、国民国家からの分離という意味でも宗教は近代以前から「グローバル化」していたと言えるのである。

本稿では上述のような宗教の独特な状況についてまず概略的な検討を加え、「宗教とグローバリゼーション」という問題設定そのものが含んでいる問題の構制を明らかにしていきたい。

2. 宗教のグローバル化は現代的な現象なのか

グローバリゼーションを、「国境を越えてヒト、モノ、カネ、そして情報が激しく行き交うような状況」とゆるやかに規定するなら、それらの移動に伴って人々の思考や行動の様式が国家の境を超えて伝播することが宗教のグローバリゼーションの基盤となると考えられる。ここで言う「国家」とは、多くの場合近代国民国家を指す。こうした限定が必要となるのは、前近代社会においてもヒトの移動はあったし、またそれに伴いモノや情報も移動していたからである。ただし、論者によっては前近代社会において既にグローバル化と呼びうる状況は存在していたと述べている。

例えば、ギデンズはこれまでのグローバル化をめぐる議論を整理し、そもそもグローバル化という概念が新しいものと言えるのか、それとも目新しくもない概念なのかを問っている⁴。そして、「旧式の社会民主主義の姿形を保守したい人々」、すなわち「旧左翼の人々」からすれば、グローバリゼーションは新自由主義の造語に他ならず、新しいものではない⁵。グローバリゼーションに対する「懐疑論者」にとって、グローバル経済はそれ以前の経済とは異なるものではなく、経済をコントロールする政府の力はそのままであり、また福祉国家は健在である。そして、グローバリゼーションという世界観は福祉国家の解体と財政支出の削減を企図する市場主義者のイデオロギーである⁶とされる。

他方でグローバリゼーションがこれまでにない新しい事態であるとする人々がいる。すなわ

ち「私たちは、国境なき世界に住んでおり、ここでは、国民国家は『フィクション』となり果て、政治家たちはまったくもって無力となる」⁷。こうした議論は主として経済の領域に関して行われてきたが、ギデンズはそれだけでなく情報化の進展に伴う日常生活の変容もそこに含めつつ、経済のグローバリゼーションは過去の趨勢の延長として捉えられるものではなく、「とりわけ先進諸国における日常生活のありようを塗り替えつつあり」、「同時にそれは国境を越えた組織と力を育みつつある」と言う⁸。

このように、グローバリゼーションをこれまでにない新しい動きと捉えるギデンズに対して、ロバートソンは、宗教のグローバル化現象は近代以後に特有とは言えない現象であると述べる。彼はグローバリゼーションが近代化の帰結であるというギデンズの単線的な発達論⁹の延長にあるという見方を批判し、そのような単純な命題では捉えることのできない現象であるとする¹⁰。ロバートソンは経済のグローバリゼーション（資本主義の力学）や政治のグローバリゼーション（帝国主義の諸力）を否定はしないが、むしろ文化的要素に重点を置き、世界システムには唯一の文化的基盤、すなわち西欧的な合理主義のみが存在するという含意を否定する¹¹。そして仏教、キリスト教、イスラームの興隆や拡散といった事実を踏まえながら、グローバリゼーションが何世紀にもわたる長いプロセスであると論じるのである。

確かにロバートソンが指摘するとおり、宗教は既に前近代社会において、特定の国、地域を越えた拡大を見せていた。それゆえに、キリスト教、仏教、イスラームといった諸宗教は民族・国境を越えて信仰されているという意味で「世界宗教」と呼ばれてきたのである。だが、こうした見方に対して疑義を差し挟むことは可能である。「世界宗教」と言われながらも、キリスト教においては、ローマ・カトリックとプロテスタント諸教派、さらに東方諸教会が存在しており、各教派において独自の展開を見せている。仏教においても、北伝仏教と南伝仏教には大き

な違いがあるし、同じ北伝仏教であっても中国、チベット、さらには日本の仏教ではそれぞれ異なっている。さらに詳細に見るなら、日本の仏教の宗派間にも数多くの違いが見いだされるだろう。つまり、あらためて論じるまでもなく、宗教はそれぞれの土地ごとに独自の展開をしているのである¹²。このように、宗教のグローバル化現象と言った場合、まず事実として宗教が本当に国境を越えて拡散していると言えるのか、という問いが生じてくるのである。つまり、宗教のグローバル化について論じる場合、宗教をどのような位相で捉えるかが問題となる。宗教を本質と現象とに分けて考えるならば¹³、より本質に注目することで宗教は普遍的なものとして捉えることが可能となり、グローバル化した現象と見なすことができる。例えば「キリスト教の本質」や「仏教の本質」ということを規定すれば、それら「世界宗教」が国境を越えてグローバル化していると言える。だが、よりミクロな視点で現象面に着目するなら、それら「世界宗教」も地域ごとに独自の展開をしていることを見いだすことができるのである。

このように考えるならば、ギデンズとロバートソンの対立は、グローバル化について考察するに当たって経済（や政治）に力点を置くか、あるいは文化現象に力点を置くかという違いであり、また宗教現象をどのような位相で捉えるかの違いでもある。その意味で、どちらが正しいかというよりも、グローバル化を捉える視点が異なっているのであり、両者の議論は相補的なものと言えるだろう¹⁴。本稿では、ギデンズに従いグローバル化を新しい現象として捉えていくが、とりわけ近代国民国家と宗教との関わりという視点から考察をさらに展開していく。

3. 近代における国家と宗教

国家と宗教の結びつきを考える場合、いくつかのパターンが考えられる。阿部美哉によれば、国家と宗教の関係の形式には、国家と宗教が合

一している場合と、分離している場合があり、また合一している場合には、国家が宗教を支配している場合と宗教が国家を支配している場合がある。宗教が国家を支配する場合には、神権政治ないし祭政一致制度が行われ、国家が宗教を支配する状況のもとでは、国教制ないし公認教制がとられる。また国家と宗教とが独立に各々の領域を成立させている場合、国家と宗教は法律や制度の上で分離され、政教分離制度が行われる¹⁵。文明の草創期においては、宗教的価値規範が統治者の意志決定を支配し、聖と俗の社会組織の分化はなかったから、国家と宗教の関係が問題とならなかった。だが、近代国民国家形成の過程において、宗教は政治と分けて考えられるようになった。近代国民国家はほとんどの場合、世俗的な国家である。すなわち、政教分離原則に基づいて営まれていく。そのようにして宗教と政治的な国家の結びつきが解かれて、宗教は私事化していった。この宗教の「私事化」のプロセスを、杉田敦の議論を参考にまとめておこう¹⁶。

公共的な問題を扱うのが政治であり、私的な問題を扱うのが宗教である、という見方、すなわち公私を区分し、政治概念を公的領域にあてはめる見方は、すでに古代ギリシアから見られるもので、そこでは経済が私的な領域とされ、両者は厳密に区別されると考えられてきた。また、キリスト教の成立以後、宗教でないものが政治だという考え方が勢力を持つ。「カエサルのはカエサルに、神のものは神に」といういわゆる両剣論は、こうした二分法を前提としている。人間の精神的な部分を教会組織が担当し、その身体的な部分を担当するのが国家であり、両者は分離している、という考え方である。このような考え方が成立したのは、キリスト教会が国家とは別に、むしろ国家に先んじて教団の組織化を進め、国境を越える堅固な組織を作り上げたからである。すなわち、宗教という名のゲームを繰り広げている人々の外延が、世俗的な政治と呼ばれるゲームの外延と一致していないことが明らかだったからこそ、両者は別物

であるという意識が生じ、両者の間の関係が争点となったのである。しかし、両者の関係を、国家が政治的であり、宗教が非政治的である、ととらえる必要はなく、17世紀のジョン・ロックにいたるまで、教会政治（ecclesiastical government）と世俗政治（civil government）を並列的にとらえるという用語法が示しており、その性格は同じでないにしても、両者が類比的であるという認識の存在は前提されていた。

だが、このような意識がやがて失われていく。それは教会と世俗国家との争いが、紆余曲折の果てに国家側の勝利によって決着し、そのために宗教的なゲームの外延が世俗的なゲームの外延と一致してしまったことと関係する。その結果、宗教は政治とは独立な、それに対抗しうるようなゲームとは見なされず、国家という単一のものの一部であると考えられることになった。このような宗教の位置づけを最初に典型的に示したのがホブズで、彼の議論では、宗教が国家から独立した形でルールを形成したり、国境を越えた単位をなしたりすることがもっとも警戒されるべきこととされている¹⁷。

このようにして、宗教や民族に基づかない、世俗的な国家が形成され、国境が引かれていく。そして国境の内部には本来文化的・民族的・宗教的な多様性が存在しているにも関わらず、あたかも一枚岩のように単一な文化が成立しているかのような見方が成立していくのである¹⁸。

宗教においてこのような見方を典型的に示しているのが、いわゆる「世界宗教分布図」であろう。日本の学校教育において用いられる地図帳や百科事典においても、世界の宗教分布図が示されている。もちろん、現実には宗教は国家を単位として分布しているわけではない。一国内に様々な宗教の信仰者や宗教施設が存在しているのが現状である。だが、国ごとの分布、さらには地域ごとの分布に一定の傾向を見いだすような宗教分布図を私たちは頻繁に目にしているのである。こうした宗教分布図を批判的に分析したのが、クレヒ¹⁹である。各国ごとの宗教

の主要分布を示した世界地図を見れば、世界が幾つかの宗教ブロックに分けられているような印象を受ける。そこでは、西ヨーロッパがカトリックとプロテスタントに、南アメリカはカトリックに、北アメリカはプロテスタントに、そして東ヨーロッパは正教会に色分けされており、アラブ世界、すなわちアフリカの北半分と中央アジアおよび東南アジアは、イスラーム圏として特徴づけられている。東アジア圏は儒教、道教、そして仏教が特徴的である。こうした主要分布には、たとえば、サミュエル・ハンチントンが主張するような七つの文化圏による世界の区分が結びつけられるのである²⁰。

しかしクレヒによれば、主要分布を構成するそれぞれの宗教伝統の実際の分布を明らかにしようとするならば、どのようにしてもこのモデルを維持することはできない。クレヒは各国ごとの宗教的多様性を分析し、韓国、アメリカ、ナイジェリアといった国々では国内において高い宗教的多様性が見られることを指摘した。そこでクレヒが問題視するのは境界線の想定である。つまり、宗教ブロック間に境界を想定することによって、上述のような地政学的思考が生まれてしまうのである。そしてこうした考え方がいわゆる「世界宗教」という認識を生んできたのではないのか。

以上がクレヒの主張であるが、さらに敷衍して考えるなら「世界宗教」という認識の背景として、まず国境が想定され、かつその国境を越えた宗教の拡散というイメージが形成されることによって、「国を超え世界に広がる宗教」としての「世界宗教」という概念が作られてきたのである。つまり、宗教のグローバリゼーションとは、宗教と国家が分離し、前者が後者の下位に位置づけられ、国ごとに単一的に宗教が存在しているという「幻想」が形成されると同時に、それに対するアンチテーゼとして「世界宗教」的な宗教観が生み出されたことによって「発見」された現象であると言えるのである。

4. 宗教の個人化と反グローバリズムの動き

ここまでは、主として国家の枠を超えて宗教が拡散していくという事態に焦点を置きつつ宗教のグローバル化を近代国民国家との関連において考察してきた。だが、本稿の冒頭で示したとおり、(宗教の) グローバル化には国民国家の役割の弱体化というもう一つのファクターが存在していた。もちろんそれは、国境を越えた宗教の拡大とパラレルに捉えていくべき問題であるが、本章ではそれを個人化と反グローバル化という二つの動きから考えてみたい。とりわけ後者に関しては、宗教がグローバル化していくという側面だけでなく、むしろナショナリズムの高まりとの関連での動きが指摘されているからである。

まず個人化の動きについて、中野毅は以下のようにまとめている。すなわち従来の宗教社会学の一般的理解では、宗教は近代化過程の進展と共に「個人化」され、その意味において民族集団などの伝統的社会という「特殊性」を超越した「普遍性」をもつようになったと言われる。また伝統社会の共同体性は、その集団の個別の宗教が主に担っていたが、近代社会のそれは世俗的な合理主義的理念が担うはずであった²¹。これは、いわゆる世俗化論と呼ばれる議論である。すなわち、伝統宗教が衰退する中で「私事化」した宗教は個人的な問題として扱われていくという議論である²²。

それに対して、島菌進は宗教の個人化について、以下のように述べる。すなわち、それを「ポストモダン」と呼ぶか、「第二の近代」と呼ぶかはとにかくとして、20世紀後半に近代と呼ばれてきた時代がある転換点を迎えたという認識は広く共有されているとした上で、パウマン²³やベック²⁴を援用しつつ、「ポストモダン」や「第二の近代」の特徴を「個人化」という概念で分析していく。すなわち、「伝統的な規範が拘束力を失い、職場での集団的統制や性別役割分業に基づく家族の統合が弱体化し、経済社

会の構成原理が生産から消費へとシフトし、個人は欲望に応じて選択することを脅迫的に促され、平準化が進むにもかかわらず個人間の差異が際立たせられ、連帯の基盤が掘り崩されていく。それを『宗教』に当てはめていくと、とりあえずは宗教においても個人化が進み、また集団統合の機能を持つ宗教の力が後退していくという結論が引き出されそうに思える」²⁵。

こうした世俗化論によれば、とりわけ経済的合理性に基づいたグローバル化と結びついて宗教の衰退がもたらされると考えられる。まさに「聖なる天蓋」なき時代の到来である。しかしながら、他方で社会が世俗化の方向へと進んでいるのではなく、むしろ再聖化が進行しているという見方もまた存在している。島菌は、個人化によって宗教が衰退するという見方だけでなく、むしろ社会の再聖化の動きと個人化の動きを結びつけた分析を示していく。いわゆる新霊性運動など個人のスピリチュアリティを尊ぶ動きが、一方で社会の再聖化をもたらしているとするのである²⁶。こうした霊性文化は個人主義的な考え方を尊んで共同体の形成を好まず、商業主義や消費主義に適合的であり、またそれらの中にはグローバルな資本主義と市場経済の拡大にポジティブに呼応し、現代世界の社会悪を軽視して未来をオプティミスティックに展望する側面も見られる²⁷。島菌が指摘しているように、一方でこうした宗教(あるいは宗教性)の個人化の動きは、市場や情報のグローバル化と結びつきながら、国境を越えて拡散しつつあるのである。すなわち、グローバル化という現象が生じていることは確かであるとして、それが世俗的・合理的価値観に基づくだけでなく、むしろ特定の共同体を離れながらも「聖」なるものを求める人々のネットワークに基づくという見方ができるのである²⁸。

他方で、そうした個人化とは対極の動きも見られる。すなわち、集団の結束を強め、伝統宗教的な価値観を復興させていく動きである。こうした集団としてはとりわけ民族集団が重要であり、その集団の共同体性を再び宗教が担って

いるか、少なくとも強化する働きをしているといえる。宗教のもつ「共同体性」や「特殊性」に、つまり民族集団その他の固有のアイデンティティを強化する働き、他の集団との差異を強調する差異化機能、個別利害を正当化するイデオロギー化機能の顕在化が、注目されている²⁹。さらには民族集団のみならず、さまざまな教派、教団においても同様の動きが見られるが、島薺によればとりわけ救済宗教は現代社会の悪や困難を正面から受け止め人類全体に及ぶ普遍的な連帯の構築を呼びかけようとしており、そしてそれらは宗教復興や原理主義(強硬派政治勢力)の広まりとして現れている。例えばアメリカのキリスト教は、1960年代以降リベラル派の勢力は後退し、福音派の勢力が著しく伸長している。アメリカの福音派キリスト教徒は、キリスト教を信じない世俗的エリートや、世俗的エリートと妥協的なリベラル派が社会からキリスト教的な価値を遠ざけていると見なして、社会にキリスト教的な価値を取り戻すことを目指している。彼らは他宗教の価値を容認せず、他の価値を奉ずるものとの対話や協力を拒み、内部の団結を重視する。これは個人化の傾向に対抗し、新たな集団化の道を選び取ろうとする傾向といえなくもない³⁰。

また日本においても、原理主義という呼称にぴったり当てはまる現象はない³¹が、排他主義的で内閉的な宗教集団の興隆が目立つ。信仰教団を「新宗教」と呼ばずに「カルト」として特徴付けるようになったのもこうした状況の反映でもある³²。島薺によれば「1970年代頃までに発展してきた新宗教教団は近代的な価値に比較的親和的で、外部勢力との連携に積極的な場合が多かった。しかし、1970年代以降に発展が目立つ教団のなかには、世俗社会の価値観に正面から対決しようとしたり、外部勢力との連携をかたくなに拒もうとするものが目立っている。内部の団結を尊び、集団外の人々との間に壁を設けようとするのである。そのように内閉化すれば、発展が押しとどめられるのが従来のパターンだったが、現代の宗教集団は内閉性を保つこ

とによって、かえって勢力拡充の力を持つ場合が少なからず見られる」³³。こうした動きは、グローバル化に対抗するものととらえることができるだろう³⁴。

5. まとめ

本稿ではまず宗教のグローバル化がはたして現代的な現象と呼べるか、という問いを立て、それが宗教をどのような位相で捉えるかによることを示した。その上で、宗教のグローバル化を近代国民国家との関連から考え、元々は国境とは関わりなく信仰・実践されてきた宗教に対して、いったんは世俗国家という枠組みを当てはめ、国ごとの宗教のイメージを形成した上で、国家を超える現象としての「グローバル化した宗教」という見方が作られたのではないか、ということ述べた。さらに、かつての世俗化論がグローバル化と宗教の衰退を結びつけて考えていたのに対し、むしろ社会の再聖化の中で宗教の個人化がグローバルな宗教運動(新霊性運動)と結びついていく反面、宗教はグローバリゼーションに反する動きとしてのナショナリズムとも結びついていることを論じた。本稿において「宗教とグローバリゼーション」という主題の下で見据えるべき問題について、概略的・包括的に触れることはできた。だが、さらにこうした分析を、個別具体的な諸問題に突き合わせて考えていくことが重要であろう。移民の増加に伴う諸問題や多文化主義社会における宗教の役割、とりわけ公共の問題においてどこまで宗教がその役割を果たせるのか³⁵、といった問題について稿をあらためて論じていきたい。

注

¹ 本稿では、「グローバル化」と「グローバリゼーション」というふたつの語をほぼ同義に用いる。

² 同主旨の論文として、阿部美哉「グローバリゼーションと宗教」『宗教研究』通巻329号、2002年、1-24頁を挙げておく。また直接引用はしなかったものの、本稿を作成するにあたり参考にした文

献として、Robertson, Roland and Garrett, William R. (eds.), *Religion and Global Order*, New York; Pargson House, 1991, Featherstone, Mike/Rash, Scott/Robertson, Roland (eds.), *Global Modernities*, London; Sage, 1995, Hadden, Jeffrey K. and Schupe, Anson (eds.), *Prophetic Religion and Politics*, New York; Pargson House, 1986, Beyer, Peter, *Religion and Globalization*, London; Sage, 1994を挙げておく。

³ こうした見方を示したものとして、井上順孝「グローバル化と宗教」同編『現代宗教事典』弘文堂、2005年、134-136頁を参照。

⁴ ギデنز、アンソニー（佐和隆光訳）『第三の道 効率と公正の新たな同盟』、日本経済新聞社、1999年、58-67頁。

⁵ 同書、59頁。

⁶ ギデنز、アンソニー（佐和隆光訳）『暴走する世界 グローバリゼーションは何をどう変えるのか』ダイヤモンド社、2001年、23-25頁。

⁷ ギデنز、前掲書（『第三の道』）、59頁。

⁸ 同書、62-67頁。

⁹ ギデنز、アンソニー（松尾精文・小幡正敏訳）『近代とはいかなる時代か？ モダニティの帰結』而立書房、1993年。

¹⁰ ロバートソン、ローランド（阿部美哉訳）『グローバリゼーション 地球文化の社会理論』東京大学出版会、1997年、1-18頁。

¹¹ 栗津賢太「『グローバリゼーション』」井上編前掲書、133-134頁を参照。

¹² こうした見方が示されている解説書として、井上順孝編著『世界の宗教101物語』新書館、1997年を挙げておく。なお、そうした展開を踏まえた上で、「キリスト教」とは何か、また「仏教」とは何かをあらためて問うことは可能だが、それは宗教学の範疇を超えた神学的・宗学的問いとなりがねない。

¹³ こうした見方を提示してきたのが宗教現象学であった。拙稿「古典的宗教現象学における『宗教』—フリードリッヒ・ハイラーを例に」島菌進・鶴岡賀雄編『〈宗教〉再考』ベリかん社、2004年、73-88頁を参照。

¹⁴ 宮永國子もまた、両者の理論が相補的であることを指摘している。すなわち、ギデنزとはグローバル化とは地域社会の破壊という作用と地域社会の再建という反作用とを同時に含んだ過程だという見方を示しているのに対して、ロバートソンは世界統合のベクトルを示すためにそれを用いるという問題関心の違いから、前者では現代社会の特性の解明に関心が集中し後者では前者よりも抽象度の高いグランド・セオリーが展開しているのである。宮永國子『グローバル化とアイデンティティ』

世界思想社、2000年。阿部、前掲論文も参照。

¹⁵ 阿部美哉「国家と宗教」小口偉一・堀一郎監修『宗教学辞典』東京大学出版会、1973年、201-202頁。

¹⁶ 杉田敦『境界線の政治学』岩波書店、2005年。

¹⁷ 以上、同書「第1章 政治と境界線」を参照。

¹⁸ アンダーソン、ベネディクト（白石隆・白石さやか訳）『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』NTT出版、1997年。

¹⁹ Krech, Volkhard, Vorstellung des Internationalen Kollegs für Geisteswissenschaftliche Forschung zum Thema „Dynamiken der Religionsgeschichte zwischen Asien und Europa“, 2009 (unveröffentl.)

²⁰ ハンチントン、サミュエル（鈴木主税訳）『文明の衝突』集英社、1998年。

²¹ 中野毅「宗教・民族・ナショナリズム — 読み解くための基礎と問題の所在」中野毅・飯田剛史・山中弘編『宗教とナショナリズム』世界思想社、1997年6-7頁。

²² こうした議論の代表としてバーガー、ピーター（藺田稔訳）『聖なる天蓋』新曜社、1975年、およびルックマン、トーマス（赤池憲昭・スィングドロー、ヤン訳）『見えない宗教』ヨルダン社、1975年を挙げておく。

²³ バウマン、ジークムント（森田典正訳）『リキッド・モダニティ』大月書店、2001年。

²⁴ ベック、ウルリッヒ（東廣・伊藤美登里訳）『危険社会—新しい近代への道』法政大学出版局、1998年。

²⁵ 島菌進『スピリチュアリティの興隆 新霊性文化とその周辺』岩波書店、2007年、275-276頁。

²⁶ 同書、278-298頁。

²⁷ 同書、298頁。

²⁸ ただし、こうした新霊性文化が日本ではネオ・ナショナリズムと親和的であるとの指摘もある。同書、303-306頁。

²⁹ 中野前掲書、7頁。

³⁰ 島菌前掲書、298-299頁。

³¹ この用語に関しては、白杵陽『原理主義』岩波書店、1999年、およびリズン、マリーズ（中村圭志訳）『ファンダメンタリズム』岩波書店、2006年を参照。

³² 拙稿「新宗教研究・カルト研究の現在」『国際宗教研究所ニュースレター』NO.62(09-1)、2009年4月、26-31頁参照。

³³ 島菌前掲書、299頁。

³⁴ 中野前掲書。

³⁵ 拙稿「宗教と公共性・公共哲学」『大正大学研究紀要』通巻92号、2007年、141-150頁において、予備的考察を行った。

参考文献

- Beyer, Peter, *Religion and Globalization*, Sage, 1994
- Featherstone, Mike/Rash, Scott/Robertson, Roland (eds.), *Global Modernities*, Sage, 1995,
- Hadden, Jeffrey K. and Schupe, Anson (eds.), *Prophetic Religion and Politics*, Pargson House, 1986
- Krech, Volkhard, Vorstellung des Internationalen Kollegs für Geisteswissenschaftliche Forschung zum Thema „Dynamiken der Religionsgeschichte zwischen Asien und Europa“, 2009 (unveröffentl.)
- Robertson, Roland and Garrett, William R. (eds.), *Religion and Global Order*, Pargson House, 1991
- 阿部美哉「国家と宗教」小口偉一・堀一郎監修『宗教学辞典』東京大学出版会、1973年、201-202頁
- 「グローバリゼーションと宗教」『宗教研究』通巻329号、2002年、1-24頁
- アンダーソン、ベネディクト（白石隆・白石さやか訳）『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』NTT出版、1997年（Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso, 1983.Rev.ed.,1991）
- 井上順孝「グローバル化と宗教」同編『現代宗教事典』弘文堂、2005年、134-136頁.
- 編『世界の宗教101物語』新書館、1997年
- 臼杵陽『原理主義』岩波書店、1999年
- ギデンズ、アンソニー（松尾精文・小幡正敏訳）『近代とはいかなる時代か？ モダニティの帰結』而立書房、1993年。（Anthony Giddens, *The Consequences of Modernity*, Polity Press, 1990）
- （佐和隆光訳）『第三の道 効率と公正の新たな同盟』日本経済新聞社、1999年。（Anthony Giddens, *The Third Way*, Polity Press, 1998）
- （佐和隆光訳）『暴走する世界 グローバリゼーションは何をどう変えるのか』ダイヤモンド社、2001年（Anthony Giddens, *Runaway World*, Profile Books, 1999）
- 島藺進『スピリチュアリティの興隆 新霊性文化とその周辺』岩波書店、2007年
- 杉田敦『境界線の政治学』岩波書店、2005年
- 中野毅「宗教・民族・ナショナリズム —— 読み解くための基礎と問題の所在」中野毅・飯田剛史・山中弘編『宗教とナショナリズム』世界思想社、1997年、3-26頁
- バウマン、ジークムント（森田典正訳）『リキッド・モダニティ』大月書店、2001年（Zygmunt Bauman, *Liquid Modernity*, Polity Press, 2000）
- バーガー、ピーター（藺田稔訳）『聖なる天蓋』新曜社、1975年（Peter L. Berger, *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*, Anchor Books, 1967）
- ハンチントン、サミュエル（鈴木主税訳）『文明の衝突』集英社、1998年（Samuel P. Huntington, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, Simon & Schuster, 1996）
- ベック、ウルリッヒ（東廣・伊藤美登里訳）『危険社会—新しい近代への道』法政大学出版局、1998年（Ulrich Beck, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Shurkamp, 1986）
- 宮嶋俊一「古典的宗教現象学における『宗教』—フリードリッヒ・ハイラーを例に」島藺進・鶴岡賀雄編『〈宗教〉再考』ペリかん社、2004年
- 「宗教と公共性・公共哲学」『大正大学研究紀要』通巻92号、2007年、141-150頁
- 「新宗教研究・カルト研究の現在」『国際宗教研究所ニュースレター』NO.62(09-1)、2009年4月、26-31頁参照
- 宮永國子『グローバル化とアイデンティティ』世界思想社、2000年
- リズン、マリーズ（中村圭志訳）『ファンダメンタリズム』岩波書店、2006年（Malise Ruthven, *Fundamentalism: The Search For Meaning*; Oxford University Press, 2005）
- ルックマン、トーマス（赤池憲昭・スィングドー、ヤン訳）『見えない宗教』ヨルダン社、1975年（Thomas Luckmann, *The Invisible Religion: The Problem of Religion in Modern Society*, Macmillan, 1967）
- ロバートソン、ローランド（阿部美哉訳）『グローバリゼーション 地球文化の社会理論』東京大学出版会、1997年（Roland Robertson, *Globalization: Social Theory and Global Culture*, Sage, 1992）